

高齢の母と娘のコミュニケーション (7)

— 「話すこと」「書くこと」による表現 —

田中 典子

要旨

本稿では田中 (2020) で考察した時期に続く 2013 年 1 月に焦点を当て、電話での会話に加え、母が書いた手紙・メモ類を含めて分析の対象とする。認知症を心配した筆者が近くに住むようになってから、母は郵便受けに手紙やメモを入れるようになったが、その内容が朝の電話での会話と矛盾することも多かった。陽気に会話を交わしたにも関わらず、筆者が帰宅して郵便受けを見ると、怒りや悲しみに満ちた手紙・メモが入っていて驚かされるということもあった。それらの比較から、認知症と共に生きる人の置かれた状況とそれに伴う心情を考察したい。本稿が、認知症を持つ人への理解を深める一助となれば幸いである。

Communication between an Elderly Mother and her Daughter (7): expressions in speaking and writing

TANAKA Noriko

Abstract

In this paper I focus on the communication between my mother and myself in January 2013, when she lived with the early stage of dementia. As the data for my analysis, I employ her letters and notes, as well as our recorded telephone conversations. What she wrote sometimes contradicted what we talked on the phone. Some of her notes were full of anger or sadness, despite the cheerfulness she showed in the telephone conversation of the same day. By examining contradictory messages between our telephone conversations and her written notes/memos, I would like to explore her psychology. I hope this paper will be of some help to understand people living with dementia.

はじめに

筆者は、母の認知症を心配し、2011 年 9 月、母の家から徒歩 1 分ほどの所に転居した。以来、母はしばしば筆者の郵便受けにメモや手紙を入れていくようになった。自作の俳句などを入れて楽しむこともあったが (田中 2020)、今回焦点を当てる 2013 年 1 月頃にな

ると、時に混乱し筆者に対して怒りや苛立ちを書き記すことも少なくなかった。本稿では朝の電話での会話と手紙・メモ類を比較し、母の置かれた状況とその心情とを考察する。

1. 先行研究の検討

認知症に関しては様々な観点からの先行研究があるが、ここでは本論にとりわけ関係が深いと思われるテーマに絞り、そのいくつかを以下に紹介する。

1.1 認知症を持つ人への介護

認知症を持つ人への介護には独特の難しさがあると考えられる。そのひとつは、相手から必ずしも喜ばれず、身に覚えのない非難を受けることもあるということである。加藤 (2011) は、以下のように述べている。

ホームヘルパーの研修などで、こんな質問をすることがあります。「手はかからないのだけれど、憎まれ口をたたく A さん」と「体重も重いし、身体ケアが大変で、とても手がかかるけれども、いつもにこにこしている B さん」、そのどちらの家に行くのがたのしいですか？すると、みな一様に、B さんのほうがいいと答えます。(・・・) 文句を言われ、憎まれ口をたたかれたりするほうが、ケアする人にとってはダメージがおおきいわけです。(加藤 2011:200)

症状が変化しやすいということも介護を難しくする。認知症を持つ人の気分や態度が刻々と変化し得るため、介護者はそれに振り回されることがある。Anthony (2014) も、以下のように指摘している。

Alzheimer's and dementia are very fluid diseases. (・・・) The person you knew in the morning may not be any reflection of the person seated across from you at the dinner table that evening. And the roller coaster ride between morning and night just repeats itself over and over. This is why caregiver burnout is so extreme with these patients.

(アルツハイマー型や【他の】認知症は非常に変化しやすい疾患である。(・・・) 朝に会ったその人が、その日の夕飯を共にする時には全く同じ人とは思えないかもしれないのだ。そのような朝と夜のジェットコースターに乗っているかのような変化が何度も繰り返される。患者のこのような極端な変化に介護者は疲れ切ってしまう。)

(Anthony 2014: 28 和訳は筆者による)

1.2 家族による介護

家族が認知症の人を介護する場合、心理面の問題はより複雑になることがある。認知症を持つ当事者の立場から、ボーデン（2003）は次のように述べている。

そして、そのような私たちにとって、自分たちをよく知り、その変化を見ている家族や親しい友人たちがいればよいかというと、そうではないこともしばしばある。そういう人たちは、私たちの変な行動を恥ずかしく思ったり、異常な点に悩んだり、反社会的な傾向にいらだったりするようになるのだ。（ボーデン 2003：69）

家族の理解について、ブライデン（2004）（結婚後、ボーデンからブライデンに改姓）は認知症を持つ人に家族の理解について尋ね、その答えを以下のように紹介している。

さらに家族は本当に理解してくれていますか、と聞いたところ、返事はこうだった。「いえ、あまりわかっていません。本気で努力していないと思っているんですよ。それに、たくさん期待しすぎるかと思えば、できることでもやらせてくれないことがあります。これはできて、これはできないという判断を、私が選ばせてもらえないんです。（・・・）」（ブライデン 2004：168-169）

上野（2015）もまた、エスポアール出雲クリニック院長の高橋幸男医師から聞いた話として、以下のように述べている。

家族は認知症者にとって、することなすこと叱責したり、非難したりする存在ですから、家にいることがくつろぎになりません。専門職も診断したり判定したり。励ますと見えて本人の現状を否定したり。「励ます」とは、ありのままを否定することと同じ。ご本人が「叱られている」と受けとめるのは無理もありません。（上野 2015：203）

1.3 認知症を持つ人の心理

被介護者である認知症を持つ人の視点から、さらにその心理を考えてみよう。

1.3.1 自尊心

上田（2014）は、認知症を持つ人の気持ちについて以下のように述べている。

自分の存在意義や役割が消えそうになり、その寂しさとつらさをカバーするのがプライド（自尊心）なのです。自分はここまで頑張ってきた、仕事や家事に励み家族を守って生きてきたという自負心がある。それを「プライドばかり高くてもできない」と

否定してしまうのは、存在意義を否定してしまうことと同じなのです。

(上田 2014:113)

しかし、高齢になり認知症が疑われるようになると、プライドが傷つくような出来事は多くなるだろう。竹中 (2010) は、診療時の注意点を述べている。

「100—七 (ママ：原著縦書きのため) は」「今日は何月何日か」「一年は何日か」という小学校低学年の児童に対すると同じテストをされることは、できないに関係なく名状しがたい不快な体験であろう。¹ (・・・) その際もなぜそれが必要であるかを本人に説明する。その上で「子供にきくようなことを尋ねて申し訳ないが、一応誰に対してもやっていることなので……」とあらかじめ断ることで、患者の屈辱感はかなり薄らぐことが多い。(竹中 2010 : 17-18)

98 歳で詩集を出版した柴田 (2010) は、その作品の中で「そんなバカな質問も しないでほしい」、「『柴田さん 西条八十の詩 好きですか？ 小泉内閣をどう思います？』こんな質問ならうれしいわ」(柴田 2010 : 30-31) と詠っている。

1.3.2 自立心

介護に関わる母と筆者との葛藤のひとつは、「自分でやりたい」という母と「手伝いたい」という筆者との争いにあった。アルツハイマー型認知症を持つ立場から、ボーデン (2003) は以下のように述べている。

私たちはさらに多くの忍耐と同時に微妙な援助も必要としているが、どうかできることまで全部とりあげてしまうようなことはしないでほしい。(ボーデン 2003 : 172)

さらに、ブライデン (2004) は、自立を保つことの重要性を指摘している。

(・・・) 代わりにやってもらえば、楽になるに決まっている。もう格闘しなくてすむのだから。しかし、そうしてしまうと、私たちの機能は日ごとに失われていく。私たちがものごとを覚えているためには、常に行動や思考をくりかえしていなければならないのだ。引きこもってしまえば、毎日まだ自分にできることを思い出すのはもっと大変になる。(ブライデン 2004 : 131)

1 このようなことを解消するため、「日常会話式認知機能評価」(CANDy)が開発されたと言われる。詳しくは、佐藤 (2018) を参照されたい。

母もこのような気持ちであったかもしれない。母の家を掃除したことから妄想が起こり(田中2015参照)、怒らせてしまったこともあった。飯島・佐古(2011)は以下のように指摘しており、筆者のケースはこれに当たると言えよう。それまで娘の仕事を応援し、自分は負担になるまいという姿勢を貫いてきた母にとって、依存しなくてはならないことには大きな抵抗があったにちがいない。

やっかいなことに、妄想の矛先が向けられるのは、身近な介護者である家族やヘルパーです。暴言を吐いたり、繰り返し責めたりと攻撃的になる場合もあります。妄想の背景には、認知症の人が暮らしていく上で依存せざるを得ない相手に、「依存することを受け入れられない」といった感情があるとされます。(飯島・佐古 2011: 48-49)

2. データ

筆者は、約10年間、出勤前に電話で母と会話しており、その会話を母の許可²を得て録音し談話分析のデータとして用いてきた。本稿では、田中(2020)で扱ったデータに続く2013年1月の電話での会話と留守電メッセージに加え、この間に筆者の郵便受けに入れられていた母からの手紙・メモも分析対象とする。

記録に当たり、電話の音声エクセルに文字化し、同日に受け取ったメモ類の記述を同列横に記載した。その際、一枚のメモはひとつのセルに記し、その日に何枚投函されたか分かるようにした。両面に書かれたものも一枚と数えた。データ化することで肉筆のニュアンスは失われてしまうが³、誤字・脱字などもできるだけそのまま記載し、推測による箇所には()、解読不明の箇所は***を付した。表1にデータ概要を示し、表2では調査対象期間である2013年1月のカレンダー上の電話会話日には○を付し、受け取った手紙やメモの枚数を□で示す。(厳密ではないが、時間が特定できるものには「朝」「昼」などを記した。)

2 2003年6月に口頭で許可を得て録音を開始し、その後、2008年8月に、念のため、本人の署名・捺印の形で書面による許可を取った。

3 実際の肉筆サンプルは、巻末資料1を参照されたい。

表 1. データ概要

媒 体	電話	書面 (手紙・メモ)
場 所	それぞれの自宅	D の郵便受け・手渡しなど
参 与 者	話し手：母 (M) 82 才 娘 (D) 59 ～ 60 才 (誕生日を挟む)	書き手：母 (M) 82 才 受け手：娘 (D) 59 ～ 60 才 (誕生日を挟む)
収録日	2013 年 1 月 自宅の固定電話からの会話のみ録音し、かつ、個人名などが話題に出てその内容が倫理に関わると判断したものは削除したため、分析対象としたのは表 2 で○を付した日である。同日に複数回、会話したものも含む。	2013 年 1 月 手紙・メモ、一枚をひとつとして記録した。表 2 の 数字 はその枚数を示す。D が夕方に帰宅して郵便受けに見つけることが多かったが、朝や夜に投函されていることもあった。いつ投函されたかは必ずしも正確ではないが、気づいた場合にはそれを記録した。

表 2. データ：2013 年 1 月

	日	月	火	水	木	金	土
○：電話会話日			1	②	3	4	5
□：手紙・メモ枚数			[3]	[朝 3]	[1]	[2]	
	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
		[1]	[2]		[2]	[1]	
	13	14	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲
	[1]		[2]		[2]	3	[3]
	⑳	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖
			[1]		[1]		[昼 1]
	27	㉘	㉙	㉚	31		
	[1]	[2]	[昼 1]				

3. 結果と考察

分析の前に、本稿で対象とする期間以前の状況について少し触れておきたい。

3.1 D の転居以前

D は 32 年間に亘り M の住居から交通機関を使って一時間ほどの所に住まい、折に触れて互いに絵葉書⁴などを送り合っていた。2002 年に M の夫 (D の父) が亡くなり、M が軽い鬱と診断されていたこともあり、2003 年 6 月頃からはほぼ毎日電話で会話もしていた。下は M から D への便りである。10 月 21 日の M の誕生日祝いの手紙への返事だと思われる。

「素敵なお手紙ありがとうございます。70 才のなかばを迎え何ともさみしさを感じます。

お仕事をもち乍らいろいろ忙しい中を何かと気づかってくれて心から感謝していま

4 一例は巻末の資料 2 を参照されたい。

す。朝の tel は 1 日のはじまりのはげみになっています。でもあまり無理のないように。今後ともよろしく。早く風邪が直る事を念じています。」 (2004 年 10 月 22 日付)

3.2 M の転居直後

M が 80 歳近くになった頃から物忘れが出始め、2011 年 9 月、D は M の家から徒歩 1 分程の所にマンションを借りて転居した。M は「スーパの冷めない距離」への D の転居について、葉書で以下のように喜びを表現していた。

「新しい生活が私まで始まった様で、ウキウキしています」

(2011.9.12 付：D の転居から 6 日目)

田中 (2013) で詳述したように、M はこの状況の変化にストレスも感じていたようだが、この葉書には D の転居を自らも楽しもうとする M の姿勢が伺える。

3.3 データ分析

上の状況を踏まえ、今回対象とする 2013 年 1 月のデータを分析する。表 2 からは、電話の有無と書面頻度との相関はあまり見られないことが分かる。つまり、電話がないことが気になったり電話の内容に刺激されたりすることが、手紙やメモを書くことの要因になっているとは言えないようである。

では、その内容はどうか。電話と書面のデータを比較検討し、顕著なできごとに焦点を当てながら、ほぼ時系列に考察する。以下の枠中のものが手紙・メモであり、1 枠が一枚を、点線は裏側に書かれていたことを表す。D は手紙・メモを受取った際、そこにコメントを記しておくこともあったので、必要に応じてそれも紹介する。

3.3.1 次女の帰省

2013 年元日には以下の 3 枚のメモが入っていた。障害を持ち施設で生活している M の次女 (D の妹)、△子が 2 日に帰省してくるようになっており、そのような時にはいつも協力して助け合ってきた。この時も M はその間の役割分担について D と話し合いたかったようだ。(3 枚目のメモ「今日位にちゃんと話しておきたい」)。しかし、すでに帰省中の夕食は D が作ると決めてあった。M はそれを忘れていたようだが、本当は自身が作りたい気持ちだったのかもしれない。

香取神社に初もうでをするので午前中は電話をしてもいません
1 日（火）は□子【D の名前】 ⁵ のところで【食事を】する事になってるんですよ、ずーと tel を待っているんですけど どうしたんですか
□子はゆうせん【悠然?】 ⁶ としてますけど△子 ⁷ は□子の家になんか行きませんよ 夏は私が△子の食事をつくらなくなっていますよ 今日位にちゃんと話しておきたいです

(2013 年 1 月 1 日)

翌日（△子の帰省当日）も、郵便受けに 3 枚のメモが入っていた。朝早く入れていったと思われる。文字が重なり、解読不明のものもあり、怒りが感じられる。

食事は□子は□子 私は私でしたいです【裏面にも書いてあるが解読不明】
今朝夜中の 2 時に tel がありました 家の tel を知ってるのは□子しかいません なぜそんな夜中に tel をしてくるんですか？よく考えて下さいよ
【解読不明】

(2013 年 1 月 2 日)

やはり食事を誰が作るかに拘りがあると思われる。また、「夜中に電話があった」と怒っているが、D には全く覚えがなかった。

このメモを見て間もなく電話をしたが、以下のように 'Good morning' と笑いで始まるいつもの会話（田中 2020 参照）であり、「夜中の電話」には全く言及はなかった。この後、正月休みで帰省する△子を、2 人で施設に迎えに行った。

- 33233⁸ D (笑) 私も今言おうと思ったら言われちゃった (笑) Good morning
もう少ししたら伺いますね
- 33234 M はいお願いします
- 33235 D はいじゃあねもうご飯食べた?
- 33236 M うん
- 33237 D はいじゃあもう少し [たったら行きまーす]
- 33238 M [はい]

(2013 年 1 月 2 日)

翌 3 日には下の歌が入っていた。上下にガムテープの跡があるので、どこかに貼ってあったものを剥がして持ってきたようであった。

5 【 】: 筆者による付加説明。

6 誤字や非文と思われるものもそのまま記し、必要に応じて説明を加えた。

7 M の次女（D の妹）の名前。重度の知的障害を負っている。

8 電話データの 2011 年 9 月 1 日からの通し番号

八十路すぎ 日々の生活おだやかに 優しき娘に感謝々々

(2013 年 1 月 3 日)

裏に D のコメントが書かれており、「ひどいけんか（内容については以下を参照）をしたので、この句がアイロニカル」とある。M はこれを持ってくることでその争いを修復しなかったのかもしれない。

翌 4 日には電話で会話はしていないが、M から以下のメモ 2 枚が入っていた。

すごーく怒っている意味がわかりません △子に今日はお姉さんが【夕飯を】つくってくれといただけです

近所の人も私が□子の家に行く事を知ってうらやましがってます。私も今日は何もつくらなくていいと（楽？）をしているけど□子が何をおこっているのか分かりません

(2013 年 1 月 4 日)

これに D のコメントが添えられており、前日の「喧嘩」の内容が分かる。

「昨日は【M が】『本当は私が夕飯を作らなかった』『△子はあまり食べさせてもらえなくてかわいそう』などと何度も言うので、ついに夕食を作っている時に大喧嘩。でも自分が何を言ったか本当にわからないのだろうか」

(D のコメント)

このように、互いに相手が何を怒っているのか理解できないという状態であったが、M は自分が怒っていたことを忘れるため、その場はそれで収まることも多かった。しかし、何か釈然としない怒りはどこかに残っていただろうと推察できる。

M は障害を持つ△子に強い愛情と責任を感じており、食事でも自分で作ってやりたかったのだろう。しかし、M はご飯にジャムを塗ったり、トースターにパンを入れて忘れてたりと、D から見ると料理ができる状況ではなかった。だが、M は、△子の食事作りという大切な役割を D に奪われたと感じていたのかもしれない。

3.3.2 食事作り

△子の帰省が終わり、施設に帰った翌日の電話では、帰省中の諍いには触れず、互いへの労いと感謝を交わし合っている。

33242 D なんか疲れ取れましたか？
(・・・)⁹

9 筆者による省略

- 33247 M □子がいろいろ面倒【見てくれたからお風呂なんか】
33248 D 【いや何もできない】 うんあの一なんか助け合っていけたらいいなと
【思ってるけど】
33249 M 【どうもありがとう】

(2013 年 1 月 6 日)

同談話の終わりに、D はその日の夕飯について確認する。△子が施設に戻ったので、また二人で夕飯を食べる習慣を再開することにしている。

- 33256 D うんそうしたらあれだから今日はちょっとおかあさんとゆっくり
夕飯でも【食べたいなと思って】
33257 M 【あそう】【どうもありがとう】
33258 D 【うんうん】 じゃあ 4 時ごろ電話するね
33259 M うん
33260 D うん
33261 M じゃ待ってます

(2013 年 1 月 6 日)

上の電話では、M は D との夕飯を楽しみにしているように思われた。夕飯を多めに作り、D が仕事で夕飯と一緒にできない日に食べられるように、帰りにタッパーに入れて「おみやげ」として持ち帰ってもらうのも習慣になっていた。

翌 7 日の朝の電話では、以下のように M(33284) は前日の「おみやげ」に触れ、喜んでいるようであった。

- 33284 M 今日は□子が作ってくれてるので
33285 D あああの一あれは昨日の余りだけど【よかったら味わって】
33286 M 【4 日分ぐらいあるから】
33287 D うんまあ利用してください
33288 M わかりました

(2013 年 1 月 7 日)

だが、その日、仕事から帰ると、郵便受けに以下のようなメモが入っていた。

□子よ一く考えて下さい。変な親かも知れませんが丈夫ならほんとうは自分の食事位作りたいのですが、食事作りをしなくなったら私は一日中何をしたらいいのですか？ I 日中テレビばかりみているのとても辛いですよ？

(2013年1月7日)

朝の電話と夕方受け取るメモの違いに D は驚いた。一週間に 2 回程度 M と夕飯を共にするだけだったので、D は M の活動を奪っているとは思わなかったのだが、M にとっては自分の役割を侵害されているように感じていたのかもしれない。

3.3.3 交友

元気な頃、食事を作って気に入った人をもてなすのは、M にとって楽しいひと時であったと思われる。翌 8 日の電話には以下のような談話がある。

33329 M なんかね○○さん【M のラジオ体操仲間】からね年賀はがきが来たからね（・・・）

33349 M うちへ来てご飯食べたりしたこともあるしあたしも○○さんち行って食べたこともある

33350 D あそうなんだ

(2013年1月8日)

しかし、この頃、M には友人をもてなすことは難しく、食事を D に頼らざるを得なくなってきた。この日のメモは以下のようなものであった。

1 週間前に□子はお母さんはもう食事の心配をしなくていいといたんですけどどうしたんですか？

りんご 2 ツ 玉葱半分 おもち 4 つ さつま芋 2 ジャガ芋 4 りんご 2 玉葱

(2013年1月8日)

7 日の電話で次回に夕飯を共にするのは 11 日だと確認し、家にもその覚書きが置いてあるはずなのだが、それを思い出すことが M には難しくなっていたものと思われる。1 枚目のメモの「どうしたんですか？」は、多分、その日（8 日）D が食事に呼びに来ると思って待っていたが、迎えがなかったので不審に感じたことを指しているのだろう。2 枚目のメモは、買い物に行こうとして書いたリストを誤って郵便受けに入れてしまったものだろうか。しかし、翌 9 日の朝の電話ではそのことには触れられなかった。M から話がない限り D もメモの内容を敢えて問い質したりはしないようにしていた。

10 日の朝の電話では、M は近所の友人について話した。林檎を持って訪ねてくれるという。M はその友人と「障害を持つ子供の親の会」で知り合い、以後、大切な旧友とし

て付き合ってきた。このような交友が続いていることは、M にとって嬉しいことだったに違いない。

- 33594 M [うん] なんか今日午後から●●さんがなんか【林檎】持ってきてくれるって（・・・）
- 33653 D ねえなんかそういう人が近くにいるだけでもずいぶんなんか励まし合ったりできるから
- 33654 M そうあの人すごく飾らないねえ
- 33655 D うん
- 33656 M 控えめないい人よ

(2013 年 1 月 10 日)

3.3.4 夕食

上の会話の続きで、D は翌日の夕食について以下のように確認し、M も嬉しそうに応じている。

- 33671 D うん明日はのま子さんの日¹⁰ですから
- 33672 M あ悪いねえ
- 33673 D [いいえ]
- 33674 M [楽しみに] してる

(2013 年 1 月 10 日)

しかし、その日に郵便受けに入ったメモは以下のようなものであった。朝の電話の様子とは違い、苛立っているような筆致である。裏面（点線下）は翌日の夕食のことを確認する内容で、多分、M は（1 日 8 日のように）D が夕飯の約束を忘れるのではないかと懸念していたと考えられる。

食事の時間になると□子から tel があります。当りまえの事です。そんなに何か食べることに感心（ママ）があるのですか？□子はすきな様に私はすきな様にします □子は朝食べないとい【未完】
11 日（金）□子の夕食 今日 10 日だよ

(2013 年 1 月 10 日)

10 「のま子さんの日」とは、一緒に夕食をとる日のこと。M がその日を忘れないよう、D（のりこ）と M（まさこ）の頭文字を取って「のま子さん」と名付けた人形にその曜日や時間を書いて持たせることにしていた（田中 2015. 3.4 参照）。

翌 11 日は「のま子さんの日」で、一緒に夕食を食べることになっていた。電話でそのことを確認すると、M(33749) はしきりに恐縮する。だが、D との関係が相互的でないことにやるせなさを感じていたのであろう。M(33751) では、自分が D に何か与えてやれないかと苦慮している様子が分かる。

33740 D (・・・) 今日のはま子さんの日ですから
(・・・)

33749 M 悪いねえ

33750 D いえ全然悪くないよ

33751 M なんかうちにあって□子にないものがないかどうかって
いろいろ見てんだけど
(・・・)

33776 D うん 4 時ごろ電話するね

33777 M うんじゃあ悪いねえ

33778 D いいえ全然悪くない私も楽しみにしてるから

(2013 年 1 月 11 日)

3.3.5 交友その後

11 日のメモは以下のようなものであった。10 日に来ることになっていた昔からの大切な友人についての内容であるが、「断ったりしないで」とは何を意味するのか D にはよく分からなかった。友人が M の家に来るのを断る、または林檎を持ってきてくれるのを断る、ということだろうか。もちろん、D にはそんなことをする気持ちは全くなく、理解することができなかった。

●●さん【近所の M の友人】の家に断わったりしないで下さい

(2013 年 1 月 11 日)

このメモに D は以下のようなコメントを添えている。

「この前、●●さんが遊びに来ることになっていると言っていたのは妄想だったのだろう。私がことわったので来なかったと思っているようだ。でも、この後、一緒にたのしく夕食をたべたときには忘れていたようだ。」

(D のコメント)

しかし、それは M の妄想ではなく、実際にこの友人は林檎を持って来てくれたようだ。一週間後、郵便受けに以下のようなメモが入っていた。仕事から帰宅して 3 枚のメモを見

つけたので、入れられた順序は不明である。林檎の数などが微妙に違うが、多分、メモを入れたことを忘れ、友人から林檎をもらったことが嬉しく、このことを伝えなければと何度も D のマンションを訪れたのであろう。

今●●さんが帰りました □子にりんごをあげて下さいと言って帰りました
●●さんは今朝りんご 7 ケ □子の家に 3 個とってきます
●●さんは□子にもりんごをあげたかったんだそうです 家に 4 つありますので 2 ケ□子にあげます
●●さんは□子のマンションはどこかわからないと言って□子の分の果物を今日くれました 私**□子に持っていく事になります りんごです りんごを 6 ケくれて 3 個が□子の様です

(2013 年 1 月 18 日)

翌日の電話では、M が持ってきた林檎について D が英語で礼を言い、それへの応答の仕方を M が尋ね、英語の学習を楽しんでいる (田中 2020 参照)。ここには前日のメモとの関連が見られる。

- 34353 D Thank you for the good apple (笑)
 34354 M どういたしましてっていうのはどう言うの (笑)
 34355 D You are welcome
 34356 M ええー
 34357 D You are welcome
 34358 M あ You are welcome ってどういたしまして?
 34359 D そうそうそうちょうどそれがぴったり (笑)
 34360 M (笑)

(2013 年 1 月 19 日)

3.3.6 健忘

その日帰宅すると、3 枚の D の電話番号などが書かれたメモと共に、「20 日 (日) 1:00 に□子が来ます. 一緒に北とびあのコンサートに行きます」という覚書きが郵便受けに入っていた。これは、翌日 (20 日) 一緒に行くことになっているコンサートを M が忘れないように、D が書いて M の家に置いてきたものだったが、M は D が忘れるのではないかと危惧したのだらうと思われる。

その後も、電話で食事の予定を話したにもかかわらず、確認するように以下のようなメモが入っていることがあり、M の不安な気持ちが窺えた。

22日(火) □【子が抜けている】のところで夕食

(2013年1月22日)

□子は食事は何も予定はないと言ったけど 29日(火) □子のところで夕食とあ(書?)
いてあるけど どうなってるんですか

(2013年1月28日)

あるならどうして tel でもいいし知らせてくれないのですか。前の日になっていったって困ります

(2013年1月29日)

この頃、Dの作る食事を共にすることは、Mにとって自立を阻害されることでもあり、またその日を忘れることで自尊心を傷つけられたり、逆にDが忘れるのではないかと不安になったりと、大きなストレスにつながっていたと考えられる。

おわりに

本稿では、2013年1月の電話での会話と手紙・メモを対象として考察した。その結果、このデータに関しては、(1) その日の電話の有無とメモの数には相関は見られない、(2) 電話とメモの内容には関連がないことが多い、ことが分かった。本人が言ったことを忘れていたり、対話の時には相手の気持ちに配慮して話していても一人になると違う感情が沸き上がってきたりすることがあるのかもしれない。この結果は、認知症を持つ人への介護の難しさを示唆すると共に、認知症と共に生きる人が持つ大きな気持ちの揺れや不安を想像させるものである。この小論がそれらへの理解を少しでも深めることになれば願っている。

謝辞

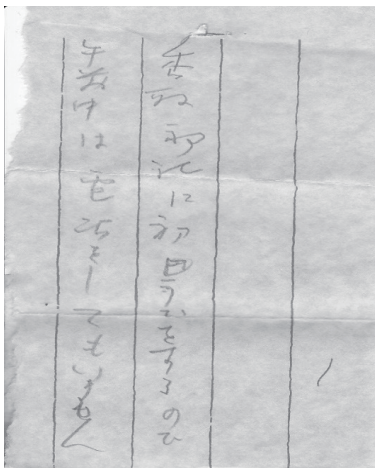
この拙論を書くことを可能にしてくれた亡き母に感謝したい。

参考文献

- Anthony, L.(2014). *The Most Important Lesson: What my mother taught me that will change Alzheimer's and dementia care forever*. New York: Morgan James.
- 飯島裕一・佐古泰司 (2011)『認知症の正体 ― 診断・治療・予防の最前線』PHPサイエンス・ワールド新書.

- 上田諭 (2014) 『不幸な認知症 幸せな認知症』マガジンハウス.
上野千鶴子 (2015) 『おひとりさまの最期』朝日新聞出版.
加藤伸司 (2011) 『認知症になるとなぜ「不可解な行動」をとるのか』河出書房新社.
佐藤眞一 (2018) 『認知症の人の心の中はどうなっているのか?』光文社新書.
柴田トヨ (2010) 『くじけないで』飛鳥新社.
竹中星郎 (2010) 『老いの心と臨床』みすず書房.
田中典子 (2013). 高齢の母と娘のコミュニケーション ― 自立と依存との葛藤の中で ― 『清泉女子大学紀要』第61号 93-108.
---(2015) 高齢の母と娘のコミュニケーション (3) ― グライスの「質の行動指針」に焦点を当てて ― 『清泉女子大学紀要』第63号 81-98.
---(2020) 高齢の母と娘のコミュニケーション (6) ― 認知症と共に生きる人の楽しみ ― 『清泉女子大学紀要』第65号 95-113.
ブライデン, クリスティーン (2004) 『私は私になっていく ― 痴呆とダンスを』馬籠久美子・桧垣陽子訳 クリエイトかもがわ [原書: Bryden, C. (2005). *Dancing with Dementia*. London: Jessica Kingsley Publishers.]
ボーデン, クリスティーン (2003) 『私は誰になっていくの? ― アルツハイマー病者からみた世界』桧垣陽子訳 クリエイトかもがわ [原書: Boden, C. (1998). *Who will be When I Die?* Sydney: Harper Collins Publishers.]

資料1



資料2

